

ひきこもり支援における多様性の考察

— 物語論的アプローチから —

桑 原 啓

1 はじめに

1.1 問題の所在

本稿の目的は、ひきこもり支援施設に通う「ひきこもり」当事者のあり方に注目し、その多様性について考察するものである。

日本において、「ひきこもり」現象が社会問題として広く認知されるようになってから、およそ20年が経過している。それに伴い、「ひきこもり」現象やその支援実践を扱った学術的成果（論文・書籍など）が数多く蓄積されてきた。論調としては、「ひきこもり」経験により一度失われた自尊心を、支援実践を通じてどのようにして高めていくのかや、施設利用過程における規範意識の相対化の必要性¹⁾、あるいは、施設利用者に対し、段階的に活動への主体的・積極的な参加を促すものなどが挙げられる。その一方、近年では当事者による発信が盛んになる中で、「ひきこもり」経験特有の「動けなさ」に注目を促す研究も存在する（例えば、関水徹平（2018））。すなわち、ひきこもり支援では、「ひきこもり」当事者間の差異に自覚的でありつつ、多様な当事者への配慮が求められる。また、支援施設での具体的な実践として、居場所の提供や就労支援などを挙げることができるが、この両者は、性質の異なるものとして理解される場合があり、時に対立的に論じられることもある²⁾。

本稿では、こうした観点を踏まえ、支援実践の行われている現場の分析を行う。そして、自尊心の回復、規範意識の相対化、主体的参加を重視する施設において、一見して、それらに当てはまらない個人が、どのように施設を利用し（あるいは自らの施設利用を正当化し）、また、施設の側（支援者の側）はその個人をどのようにみなしているのかについて検討する。

1.2 先行研究

「ひきこもり」当事者を対象とした先行研究では、自己の「回復」過程とその困難が論じられてきた。例えば石川（2006）によると、「ひきこもり」当事者が自己・労働・生について問うことは、自己と社会を接続させる契機となる。そして、当事者は仲間との信頼関係を築く中で自信を回復させたり、働けない自分に対する卑下を経験したりするなど、右往左往しつつ社会との接点を模索するのだという（石川 2006: 40）。また、他者や社会への信頼回復については、居場所における承認機能が重視されている。当事者へのインタビューから居場所の承認機能を考察した

足立弦也（2019）は、ひきこもり支援団体の運営する居場所にかんして、そこでの関係性とは、基本的な承認を喪失した個人に対し、承認の再構成を促すことや、規範意識を緩和させるものであるとした。

さらに、御旅屋達（2015）は、施設外部への社会参加に至るプロセスとして、利用者の居場所への参加の度合いが高まることを論じている。その事例の中では、例えば、ある利用者が居場所利用者として施設内のイベントに積極的に参加している点をもって、参加の度合いが高いとみなされている。また、山本耕平（2009）は、居場所実践について、「ひきこもり」当事者が集団内で民主的に自治する過程を通じて、「ひきこもり」や支配的な価値観と向き合う主体性を育むことが必要であると述べる。そして、「当事者の意見や意志が反映される柔軟性は、実践が展開され、言葉を発する自由も、逆に発しない自由も与えられる」とする（山本 2009: 26）。これらの先行研究では、自治活動（イベント）を含む居場所内部にかんして、自治に参加しない自由を保障しつつも、当事者による主体的・積極的な参加が重視されていると言える。

一方、一部の支援者からは、利用者の施設利用が長期化したため、通所年限を設けたという事例が報告されており（田中俊英ほか 2005）、それを受けた中村好孝・堀口佐知子（2008）によって、いかにして利用者を施設から「押し出す」か（いかにして利用者に施設の外部社会への参加を促すか）という問題提起が行われた。これらの研究や実践報告は、施設を長期利用している利用者を、施設に停滞する者とみなしていると考えるべきだろう。

さて、上述の先行研究で論じられてきた、規範意識の相対化や集団への参加の度合いという支援実践のプロセスには、高い学術的・実践的意義があると思われる。したがって、筆者は規範意識の相対化や、活動を通じた利用者の主体性の獲得を論じた先行研究と問題意識を概ね共有している。しかし、先行研究で紹介されてきた事例や実践方法に、完全には当てはまらない利用者が存在することもある（無論、先行研究はそうした「例外」を予想していない訳ではない）。とりわけ、利用者による主体的・積極的な参加を重視している施設において、そうした参加を行わない利用者の様相と、職員の対応について記述する必要がある。これにより、ひきこもり支援の多様性の確保に貢献できると考える³⁾。また、利用者の施設の長期利用が問題視される中で、そうした利用者を施設に停滞しているとみなす論調には違和感を覚える。長期間施設を利用する彼らに対し、そうした眼差しを向け続けることは、彼らの施設でのあり方を一面的にしか捉えておらず、そうせざるを得ない背景にまで注目する必要があるだろう。このような観点から、施設での「ひきこもり」当事者のあり方を検討するために、本稿ではひきこもり支援施設の利用者のインタビューデータの分析を行う。その際に、分析枠組みとして、K. Gergen による物語論を参照する。

1.3 分析枠組み

本稿では、分析枠組みとして、物語論的なアプローチを採用する。Gergen & M. Gergen（1988）は、物語の形式が、「安定的物語」「上昇的物語」「下降的物語」の3つに区分されると述べている。それによると、安定的物語では、そこで語られる個人が、本質的に不変であるかのよ

うに出来事が結びつけられ、評価される。それに対し、物語上の諸経験にかんする評価を、上昇させるか、あるいは下降させるかのいずれかの方法で接続するのが、上昇的物語と下降的物語である（Gergen & M. Gergen 1988: 24）。本稿では、これらの形式（と、その組み合わせ）をひきこもり支援実践の文脈に照らし合わせて用いる。例えば、川北（2006）は、「本人はデフォルメされた社会規範によって責められ、また小さな挫折の繰り返しにより自信を失っている。将来に向けてこれらの状態を解きほぐすのが居場所の実践である」（川北 2006: 256-257）と述べる。この場合、「ひきこもり」当事者は、自己評価が低く安定した状態から、施設の利用を通じて自己評価を上昇させていく物語が構想されている。

また、Gergen & Gergen は「長期間にわたって発生した出来事を関連づけようとしたり、短期間における出来事の連関を決定したりすることがあり得る」（Gergen & Gergen 1988: 34）と述べる。ここで石川（2006）を参照すると、当事者は、自信回復や、働けない自分の卑下など、右往左往しつつ社会との接点を模索する。この場合、それが「ひきこもり」当事者によって語られる時間軸に応じて、物語は短期的には上昇と下降を繰り返すかもしれないが、長期的には自己評価が上昇（あるいは下降・安定）している可能性がある。あるいは、施設を長期間利用している「ひきこもり」当事者は、総じて自らに変化がないという観点から、施設に慣れた頃から現在に至るまでの過程を、安定的に語る可能性がある。

さらに、Gergen（1994=2004）は、自己物語は他者との関係性を通じて構成されると論じる。すなわち、自己物語は、その内容にかんして、時に自己物語に登場した他者による確認と承認の影響を受ける。本稿では、主にインタビューの分析を行うが、施設利用者が自己について語った際に、その場にいた者は施設職員と筆者である。とりわけ、利用者が施設との関連で自己を語る時、職員に対しても、自己物語が開示されたとみなすべきである。本論に先行して述べると、職員の配慮により、彼らはインタビューにあまり介入することがなく、事実レベルで大きな矛盾を指摘されることもなかった。

さて、本稿が分析枠組みとして物語論的アプローチを採用するのは、利用者の語るライフヒストリーにおいて、支援（を受けた時期）の位置づけが明確化すると考えるためである。すでに論じたように、ひきこもり支援では、特に居場所を運営する施設の場合、既存の価値観に対するオルタナティブの呈示が重視される傾向にある。その意味で、支援施設では社会規範にある程度懐疑的になることが求められる。同時に、支援施設には、「回復」に向けた「望ましい」参与の方法が存在する。したがって、以降では、施設においてなにが「望ましい」ことなのかを、支援実践を行っている職員の語りから見出しつつ、そうした環境下で利用者がどのように自己を（再）構成しているのかに注目していくこととなる。

2 調査データと方法

本稿では、若者支援事業を行っている施設（以下、施設 X）において、2018 年 2 月、10 月か

ら12月、および、2019年6月に実施した半構造化インタビューのデータを利用し、分析を行う。調査協力者（施設Xの利用者・職員）に対しては事前に調査目的や概要を説明し、その後、同意書への署名をもって、研究への参加を承諾したものとみなした。本稿では倫理的配慮として、施設名や調査協力者のプライバシーを侵害しかねない情報は符号化するか、表現を変えて記している。また、方言が使われている場合は、場所の特定を避けるため、標準語に変えて記している。なお、インタビュー引用文の注釈は（ ）、言葉の加筆は〔 〕で示し、中略は（中略）と記す。

3 結果と分析

本節で分析するのは、施設内で活動を発案および主導した経験のあるAさん（24歳男性、在籍年数2年）と、そうした経験のあまりないBさん（29歳男性、在籍年数4年）の語りである（彼らの参加の様子を見ていた職員による語りを含む）。

3.1 主体的・積極的な参加者

本項では、まずはAさんの語りを中心に分析を行う。分析に移る前に、Aさんが部長兼脚本を担当する演劇部の活動を概観したい。演劇部は、後述するように、Aさんの発案によって始まった活動である。普段は主にAさんが考えた脚本を参加者が朗読するという形で進められるが、年に1度か2度、外部向けに朗読劇の公演がある。本節にて言及する2018年10月に開かれた朗読劇公演の場合、Aさんによる脚本の作成の段階を含めると、同年6月から公演に向けた準備が行われた。この他に、演技に直接はかかわらない作業（例えば、台本の印刷や紙の台本を厚紙に貼り付ける製本作業）には職員も関与する。だが、筆者が公演に向けた練習に参加した時は、職員は活動内容に積極的に関与せず、演技指導や指示は主にAさんが行っていた。

さて、Aさんの活動への参加について分析する前に、彼の施設利用に至る背景を確認しなければならないだろう。中学を卒業後、Aさんは高校へ進学したものの、高校1年生の時に出席日数の不足から2度留年を経験し、高校を退学した。中退後は、施設Xの近隣にある母の実家に移り住み、そこで「ひきこもり」を経験したとしている。とは言え、祖父母の畑の手伝いをするなど、「ひきこもり」期間とは言え、常に自室にひきこもっている状態ではなかった（以降、インタビュー中のQは筆者）。

Q：[母親から施設に] 行ってみないかいって言われた経緯はどういったものなのでしょう。

A：うーん、まあ、何て言えばいいのかな。それまで結構体調がよくなって、体調的な問題が多くて、頭痛がするとか、人混みに出るとパニックみたいになるとか。そういう、なんていうのかな、実際の症状って言うか、そういう起こるものが多かったんですけど、それが落ち着いてきたなーっていう頃にそういう紹介があって。（中略）小学校三年生の時かな。〇〇（〇〇は地名）の方へ引っ越しまして。（中略）〇〇の同級生とかがい

きなり入って来た僕に対してよそ者だかっていうか、よくわからない奴だかっていう風に思われちゃって、全然馴染めなくて。(中略) 中学、高校までずっとその生きづらさの中にあって、で、あの、症状として頭痛とか、うん、人混みに対して恐怖感とかが出て来たのが、中学生ぐらいの頃っていう感じですね。(2018年2月6日)

ここでAさんは他者との相互行為が必要になる場面(特に人混み)において、自らに生じる異変を「症状」という言葉を用いて説明している。その上で、引っ越した先の小学校で経験した困難を「馴染めなくて」と表現する。この語りの後、彼はいじめを受けていたと語るのだが、それについても、「割と受け入れてたかな。不満に、とは思ってなかったかもしれないですね。なんか、そうだよな、お互い馴染めないよな一っっていうような、うん。納得みたいなのはしてたかな」(2018年2月6日)と語っている。彼は「いじめ」という形で「被害」を受けているのにもかかわらず、敢えてその経験を「馴染めない」という言葉で、自らを「納得」させていたと言える。

そして、Aさんを悩ませていた「症状」が緩和された頃に、彼は母親の紹介で施設Xへと通うようになる。調査当時、Aさんはそこの演劇部の部長兼脚本を担当していたが、演劇部自体は入所した当初に提案されたのではない。Aさんは施設の利用を始めた当初、主にフリースペースに参加していたが、その頃について彼は、「最初はね、あの一、全然しゃべれなくて。人見知りが強いんで。うーん、ここ(施設Xのフリースペース)に来てぼ一っとしてるのが多かったかな」(2018年2月6日)と語っている。そして、筆者が「施設Xに通ううちに、自分の中でどんな変化がありましたか」(2018年2月6日)と尋ねると、「まあ、やっぱり人とかわかることに對して恐怖感っていうのが若干薄くなって、あの一、意外と人見知りでもないな、自分と違って。意外と人とやっていけるなと思って。そういう自信がついたっていうのが一番大きいかな、と思います」(2018年2月6日)と彼は語った。このように、彼の場合はフリースペースへの参加から、次第に施設Xの活動に順応していったと思われるが、この時点ですでに、自己評価の改善が見られることから、語りが上昇的傾向にあると言える。

やがて彼は、他の利用者によって運営されている活動に参加する中で、「僕もなにかやれることあったら面白いのにな」(2018年11月17日)と思うようになり、自らの趣味である執筆を活かすことのできる演劇部を発案するに至る。しかし、実際に施設外部に向けた演劇公演を実施するにあたり、彼は困難に直面したことを語る。

A: 劇をやることに対してのプレッシャーは全然なかったんですけど、そうやってスケジュールを決めますのでお願いしますっていうとか、この役をお願いしますっていうとか、うん。今日は休みます、すみませんって連絡をするとかがすごい大変で。(中略) 人に頼るっていうのが、すごい僕にとっては冒険で。(中略) それ(人に頼れないこと)はやっぱりずっとあることで。普段の生活でも、これお願いしますとか、普通の世

問話を振るのにも、僕は結構苦勞する。話しかけて今邪魔じゃないかな、とか。今なら連絡送って平気ですかねみたいな。(2018年10月30日)

このAさんの語りからは、彼が朗読劇の練習そのものより、練習と練習の間の連絡に負担を覚えていたことがわかる。上記の語りを参照する限り、演劇公演に向けた準備期間のAさんの自己物語は下降傾向にあると言える。それにかんして、Aさんは「人に頼るっていうのが、すごい僕にとっては冒険で」と述べている通り、他者に対して一歩踏み出せるような関係性を、それまで経験してこなかったことに起因するものだと考えている。彼にとってそれは、日常生活でも感じてきたことなのだという。

ここで、自らの「いじめ」の経験を、彼自身が転校後の学校に「馴染めな」かったことに原因があると説明したAさんの語りを再度参照したい。その語りは、決して同級生を擁護してはいないが、「加害者」である彼らの心情を推し量り、まるで「配慮」しているかのような印象さえ与える。演劇部での苦勞を述べた上記の語りに立ち戻ると、彼の自己物語には、過剰なまでの他者への「配慮」が通底している。少なくとも、インタビューの場では、彼はそれを克服すべき課題として自覚的に語っている。この困難に直面したという経験を、職員はインタビューの中で肯定的に語っている。以下の語りは、利用者が主体的に居場所活動を運営するべきだと述べていたCさん(44歳男性、前施設長)に対し、どうして彼がそれを重視しているのか確認するために筆者が質問した時のやり取りである。

Q: どうして、その、主体的であることが重要なんですか。

C: 彼ら(利用者たち)は、主体になって何かをするという経験が少ないから。(中略)[利用者]例えば演劇部するってなったら、自分の中でイメージを組み立ててできてしまう。でも、実際やってみたら、なかなかそうはいかない部分がいっぱいある。で、そのイメージと実際っていうところのやっぱり乖離が激しいんだよね。それをイメージと現実と一緒に合わせてくるっていう、合わせてから同列にするというか。っていう作業を演劇部ではしてるのかなって思うけど。(2018年11月23日)

このCさんの語りによると、演劇公演に向けた主体的な組織運営は、利用者(とりわけAさん)にとって、自らの想像と経験しなければわからない現実との乖離を埋め合わせるものとして位置づけられている。また、Aさんの語りにあった演劇部の欠席の連絡については、職員のDさん(42歳女性、施設長)の語りの中でも登場している。彼女によると、Aさんが他の部員に体調不良による欠席連絡をすべきか決めあぐね、Dさんにメールを通じて判断を仰いだことがあったのだという。だが、DさんはAさんに対して、練習をどうするか自ら他の部員に相談するようにと最終的な決断をAさんに委ねた。そのことについて、Dさんは「すごくだからしんどい作業だったと思うんですけど、こっちで引き受けなくて良かったと思ったんですよ、私は」

(2018年11月24日)と振り返っている。この敢えて演劇活動にかんして判断を下さない、つまり、積極的に活動に干渉しないというDさんの対応は、先のCさんの語りにもあった、利用者の主体的参加を重視する考えと合致し、それが職員の中で「望ましい」とされていることがわかる。

さて、ここで再びAさんの自己語りの分析へと戻る。活動への主体的参加を経験する中で、Aさんは、演劇部への関与の仕方を変えていく。それが、演劇部が居場所となっているかを筆者から尋ねられた時の、以下の語りに表れている。

A：僕が来ないと活動日、活動できませんので、完全に僕休みイコール演劇部休みになってしまうので。むしろ僕が演劇部という居場所を、ちゃんと守りますみたいな。(中略)
自分がいて大丈夫なのかなっていうのが常にあるんで。施設Xでも、なににしても。演劇部はむしろ僕がいないと。(2018年10月30日)

上記のAさんの「自分がいて大丈夫なのかな」という語りは、前述したような、過剰なまでの他者への「配慮」のことであり、彼は自分の存在が他者の迷惑になっていないかを常に気にする傾向にある。だが、演劇部は、彼自身が主体的に活動を運営する場であるため、むしろ自分を活動に欠かせない存在だと考えている。こうして、彼は居場所の主体的・積極的参加者としてのアイデンティティを形成するに至っており、運営上の困難を克服したという意味で、上昇的に自己を語っていると言えよう。

最後に、Aさんは、演劇公演を経て、彼自身がどう変化したと語っているのか、職員のDさんを交えた以下の語りから検討したい。

A：もともと他人にお願いしますっていうのが本当に苦手なたちで。(中略)他人に頼っていいのかっていうところが、今回[の演劇]は大きかったかな。

Q：なるほど。それは演劇以外でも変わってきた。

A：そうですね。まあ、ここだけの話、今回、この間、人生初の経験をしまして(「ここだけの話」とあるが、Aさんから、この語りを引用することの許可を得ている)。

D：えー。

A：自分から[他の利用者を]遊びに誘うっていうね。(中略)なんか適当にお昼でも食べませんかっていう。

D：ああ、そうだったの。

A：適当に行きませんかっていう。

D：わかる。軽い感じで。

A：うん、軽い感じで誘うのが憧れだった。

D：ああ、すごい、そっかそっか。そうだったんだ。すごいなあ。(2018年11月17日)

ここでは、演劇公演の準備を経た日常生活での変化（気軽に食事に誘うこと）が語られている。それまで他者に対して、過剰な「配慮」をしてきたAさんの態度も、徐々に緩和していると言える。また、このAさんの変容を、職員のDさんも肯定的に捉えていることもインタビューからうかがえる。

以上、Aさんの語りと、Aさんに対する職員の認識を確認してきた。以上のインタビュー結果からは、Aさんが施設での活動を通じて、時に困難に向き合いながらもそれを克服し、自己肯定的なアイデンティティを形成していったことがわかる。その意味で、Aさんの施設での自己物語は、上昇と下降を経験しつつ、最終的には上昇的物語となっている。ただし、本稿の目的は、こうした肯定的な変容や、それを可能にする実践の記述をすることではなかった。むしろ、施設で「望ましい」とされる主体的・積極的な参加をしない利用者の認識に重点が置かれていた。本項で、活動への主体的・積極的な参加を果たしたAさんの語りを記述したのは、主体的・積極的な参加を行わない利用者の自己語りとの比較を通じて、この施設の支援実践の性格が明確に表れると考えたためである。したがって、支援実践という性格上、主体的・積極的な参加をしない利用者が排除されているとは考えにくく、そうした利用者のあり方が、なんらかの理由で承認されていると予想できる。よって、以降では、活動への主体的・積極的な参加があまり見られない利用者の語りを中心に上げる。

3.2 緩やかな参加者

本項で分析するのは、施設で推奨されていた、活動を主導したことのないBさんの語りである。Bさんは初回調査当時、在籍年数が4年を経過しており、Aさんよりも長期間施設を利用している。しかしながら、施設の活動には継続的に参加しているものの、新たな居場所活動を発案・主導することはない。調査を開始した当時、筆者はそのようなBさんが、施設に馴染めていないのではないかと考えた。

では、Bさんは施設での活動をどのように位置づけているのだろうか。それを確認する前に、Bさんが施設を利用するようになるまでの経緯を明らかにする必要があるだろう。彼は、小学校から高校まで通った後、一年の浪人期間を経て自宅から通える距離にある大学に合格した。「大学行くのはねえ、もう、親の、親のため」（2018年2月7日）と語る彼は、小学校時代から、母親より学校の宿題以外に勉強の課題を与えられ、それをこなす日々だったのだといい、進学校の高校に通っていた時は、「1日も休まずに通」った（2018年2月7日）と語る。その後、大学に進学し、受験勉強から解放された彼は、大学に「燃えカスを燃やして1年間行った」（2018年2月7日）のだという。そして、専攻への関心を失ったBさんは大学の「コンピューターサークル」に所属した後、「TRPGサークル」（TRPGサークルには在学2年次から加入し、休学中に入入っていた）の活動に参加し、2年次で留年した後に退学した。Bさんに特徴的であるのは、この「TRPGサークル」に入入っていた時期から、「ひきこもり」を経験していたと考えている点である。

Q：それ（TRPG サークル）は、どういう経緯で知ったんですか？

B：まあ、いろんな部活の張り紙が貼ってて、ああ、なんだろうなと思って行ってみた。

（中略）引きこもっている間の、休学している間の息抜きとしてよく行ってました。（中略）まあ、私はどっちかっていうと、多少外出る風なので、完全に部屋に引きこもるって感じではないんですね。（2018年2月7日）

上記の語りを参照すると、Bさんは、「外出可能な『ひきこもり』』と言えるのかもしれない。だが、「外出可能」という肯定的な言葉で彼の「ひきこもり」経験を形容すると、彼の「生きづらさ」を捉え損ねかねない。彼はインタビューの中で、幼い頃から現在（調査当時）に至るまで、母親の過干渉について繰り返し語っていた。彼は専業主婦で家庭にいる母親から逃れるために、「外出せざるを得なかった」のではないだろうか。それは次の語りに象徴的に表れている。

Q：お母さん、うるさいよみたいな感じに思ったことはないんですか。

B：ん？ うるさいよって言ったら泣いてしまいますし。（中略）毎日のようにね、母がね、なんて言うのかな、会話がとにかくつまんない。（中略）毎日私の頭に知識を増やそうと、ベラベラベラベラ耳元で「勝手にしゃべるよー」って、「勝手にしゃべるけどいいよね」って説明してるんですよ、いろんなものを。（中略）もううんざり。（2018年2月7日）

このように、Bさんが母親に対して、好意的に語ることはほとんどなかった。特に彼は、母親との会話を苦痛に感じているようである。また、大学を中退した当時の母親の反応についても、次のように述べている。

Q：お母さんは結構、大学行け行けって話をされてましたけど、お母さんは気になったりとか。

B：んー。大学中退する時はかなり泣かれましたね。

Q：あー。なんで中退するのって？

B：うん。泣かれましたね。頭ではわかってるけど納得はしてないって感じ。

Q：あー。

B：あと、その時母も荒れてて荒れてて、同じ、私と同じくおかしくなって。親子揃って引きこもり。（2018年2月7日）

もともとBさんに難関大学への進学を期待していた母親は、彼の中退に否定的な反応を示したという。他の家族（父親と妹）についても、父親はBさんに無関心、妹は母親の味方をすると言っていたことから、Bさんが家庭内に居場所を有していたか疑わしい。したがって、Bさん

にとって居心地の良くない家庭環境が、彼に外出を促していたのではないか。すなわち、「ひきこもり」という認知を維持しながらも、家庭から逃れるために「外出せざるを得ない」状況だったと考えられる。そして、この状況は、彼が施設に通い始めた時のことにかんする語りの中で、以下のように明確に表れている（ちなみに、彼は自宅から通える距離にある施設を自ら探し、現在の施設を利用するに至っている）。

Q：なるほど。通ってて、辛いな、とか楽しいなとか思ったりはしましたか。

B：やっぱ、やっぱ家にいなくていいから楽しいなと思いましたね。（中略）うん。ここ、居心地がいいと思って。（中略）親の話し相手って結構疲れるんです。

Q：なるほど。で、ここ居心地がいいと。どうして居心地が良かったと。

B：まあ、結構緩いから。（中略）好きな時に来て好きな時に帰って。（中略）特に最初のうちはあんまそういう活動（特定の活動）とか「に」は参加しなかった。もうちょっと慣れてきてから参加しようと思って。

Q：じゃあ、最初の頃は何を。話す？

B：話す。話とかここに来てごろごろするとか。くつろぐとか。（2018年2月7日）

Bさんは親（母親）の話し相手から解放され、「好きな時に来て好きな時に帰」ることのできる施設のあり方に、居心地の良さを覚えていた。彼にとっては、フリースペースで何もしない時間であっても、家庭から解放されるための重要な時間であったことがうかがえる。利用者にもよるが、施設を利用し始めた頃の利用者は、まずはフリースペースで会話をするか、トランプなどの簡単なゲームに興じて過ごすことが多い。実際、前述のAさんも、Bさんと同様に、入所直後はフリースペースにいるだけのことが多かった。よって、初期の段階でこうして緩やかに参加するという点で、Bさんは特殊であったとは言えない。だが、Aさんの場合は、次第に活動への参加の度合いを増していき、活動を主体的に運営するに至っており、Aさんの自己物語は上昇的傾向にあった。その点、Bさんは施設での活動に参加するようにはなるものの、（Aさんより在籍年数が長いにもかかわらず）Aさんのように活動を主導することはなかった。この背景には、集団で活動すること自体が苦手であるというBさん固有の事情が存在すると思われる。Bさんは「さすがに5、6人集まってきたらしんどくなりますね、一度に」（2019年6月8日）と述べるように、居心地の良さを感じられるのはおよそ4人までと述べている。ただし、大学時代に複数のサークル活動に参加していたことからわかるように、集団での活動に全く参加できないのではない。

このように、必ずしも施設Xの活動に積極的に参加しているとは言えないBさんだが、普段の会話にかんしても積極的に行う方ではない。

Q：どういう話をしますか、メンバーと。

B：んー、どういう話。

Q：特に。

B：特に、会って一緒にいるだけでもいいって感じなんで。話す時は、波長があったら話すこともありますし、話題が合えば、話すこともあると思います。でも、基本まあ、会うだけでもいいって感じ。(2018年2月7日)

Bさんが「会うだけでもいい」と述べているように、会話でさえも、居場所の参加に必要であるとみなされている訳ではない。このように、施設の運営する居場所に居心地の良さを覚えて以降は、安定的に自己が語られている。

以上、Bさんは最低限の参加は果たしているが、積極的な参加者であるとは言い難い。活動への主体的・積極的な参加が推奨されている施設Xにおいて、継続的に施設に通っている参加者の中では、Bさんは一見して異質である。だが、果たしてBさんは、施設で重視されている「望ましい」ことに反した存在であると言えるのだろうか。仮にそうだとすれば、特に職員から、強制ではないにしても、積極的に活動に参加するようと言われるだろう。しかし、実際には、職員の語りの中で、Bさんに積極的な活動への参加を促すような語りは存在しない。むしろ、職員は、Bさんが自らの現状を十分に把握していると語る。

Q：Bさんとは就労にかんして話すって機会がありますか。

C：ないことはないかな。けど、自分はこの生活がいいんでっていう。

Q：この生活っていうと。

C：今「施設の運営する」カフェで週何回かで働いて。彼は無駄遣いをしないし、家から通う。(中略) だから彼の思う生活が今できてるんだと思う。

Q：彼が思う生活っていうのと、緩やかな生活っていうのは一致してますか。

C：彼の場合は一致してるんじゃないかな。(2018年11月23日)

D：[Bさんが] 目指してるのはやっぱり、一般の普通っていうのがあるかもしれない。あるかもしれないけど、今はそこまでの状態じゃないからって段階をきちんと考えてるかなっていう感じはすごくあります。そうですね、やっぱり一般就職するのが最終目標っていうのはあるかな。あるかもしれないけど、今の状態では難しいっていうのはちゃんと理解してると思う。(2018年11月24日)

Cさんへのインタビューの中で、筆者は「緩やかな生活」という言葉を使っているが、これは、この日のインタビューで、Cさんが「緩やかな生き方」という言葉を使っていたことを受けたものである。「緩やかな生き方(生活)」とは、Cさんによると、「終身雇用が守られて、正社員で、それである一定の年齢になったら結婚して、子育てをして、家建てて、それで定年して老後を迎

えるっていう、スタンダードな日本の価値観に対する緩やかな生き方」(2018年11月23日)である。Cさんは、この生き方を利用者に対して強制こそしないものの、いわゆる就労規範に囚われないためのものとして重視している。就労規範を内面化している利用者もいる中で、Bさんはこの「緩やかな生き方(生活)」を体現する存在として、Cさんによって肯定的にみなされている。したがって、「彼の思う生活が今できてる」とCさんが判断する以上、ことさら、彼の活動への参加の度合いを高めるように促す必要はないと言える。また、Dさんも、Bさんが「一般就職するのが最終目標っていうのはあるかな」としつつ、現状、それが困難であることを彼が把握していると述べる。

CさんとDさんの語りを総合して浮かび上がるのは、現状に対する理解から、ライフコースをめぐる社会規範から一定程度解き放たれた選択をしたという、Bさんの姿である。そうした選択をしたBさんは、施設の活動をめぐって、他の利用者に求められているような主体的・積極的な参加を回避することが許されているという側面がある。なぜなら、すでに彼が、一般的なライフコースから解き放たれた生き方を、(部分的に)体現しているためである。彼自身、支援施設以外での就労を望みつつも、次のように語る。

Q：支援じゃないところのどういう点が普通じゃないと思いますか。

B：やっぱり、他の支援じゃないところと比べると多少厳しいところがあったり。やっぱり一般的に、急に休むなんてこともできないし、仕事もノルマがあるし。(中略) [今は、施設の運営するカフェで] 緩い状態でやらせてもらってる。(中略) まあ、いつかは [施設の外部で就職] しようとは思っているけど、なかなか勇気がないですね。面接も緊張しますし。(2018年10月20日)

Bさんは、現状、緩い状態で働いているとしつつも、将来的には別の所で働くことを希望する。だが、調査当時はその「勇気がない」ため、実行に移せないと語る。また、初回のインタビューでも、「将来的には、やっぱどこかで働きたいかな、と。地元で。(中略) やっぱ安定して収入を得たいからかなーと思って」(2018年2月7日)と語っていることから、将来的には施設の外部での就労を望んでいることがうかがえるものの、それが可能であるか、冷静に判断を下している。このように、自身の置かれている状況について、冷静な判断を下すBさんだが、家庭内では、以下のような生きづらさを抱えてもいる。

B：自分は [今、施設Xの運営するカフェで] 働いているんだろっていう感じで自分を納得させる。(中略) ひきこもりにとって、私にとって、働かなくてずっといるっていうのはそれだけで罪悪感が湧くんですね。で、バイトでもいいから、働いているっていう事実を作りたいんです。で、自分を納得させる。そして、その罪悪感を減らす。まあ、生きるために。(中略) [施設Xのカフェは] 緩い感じで安心できるっていう感じですね。

Q：そうした安心できる場所って、今、他にはあったりしますか。

B：安心できる場所か。他には思いつかないですね。

Q：ああ、家とかでもダメですか。

B：家はねえ。家はまあ、住んでるところでもあるけど、常に罪悪感（一日中働かずに家にいることへの罪悪感）との戦いだし。（2019年6月8日）

このようにBさんは、家庭内で、就労規範の適用による「罪悪感」を意識している。特にこの「罪悪感」をめぐる、Bさんは施設Xのカフェで働くことにより、「罪悪感」を軽減させているが、休日はそれができないのだという。この語りを参照する限り、彼が完全に就労規範を相対化しているとは言えない。しかし、彼は単に就労規範に囚われているだけでもないと筆者は考える。なぜなら、彼は「生きるため」、すなわち生存戦略として働いている事実を作っているためである。このように、Bさんの施設入所後の自己物語は、調査当時の時間軸に近づくほど、小さな上昇と下降を繰り返しつつ、総じて安定化する傾向にある。しかし、その内実は「安定化（安定的）」という言葉とは異なり、罪悪感との葛藤と、様々な生存戦略で埋め尽くされている。

ところで、主体的・積極的参加を果たしていたAさんの自己物語は、施設入所以後は、上昇・下降を描きつつも、ひとつの困難を克服した自己として総合的に上昇傾向にあった。それに対し、Bさんの自己物語は、施設入所直後は緩やかに上昇の傾向を示しつつ、やがて安定化したと言える。また、職員はAさんに対しては主体性の獲得を期待し、Bさんに対しては一定程度の社会規範の緩和をもって彼の現状を肯定していた。このように、施設内では、利用者の主体的参加が期待されつつも、それが同調圧力へと転化することが防がれていたと言える。しかし、ここでひとつ疑問が生じる。果たして、本稿がBさんを主体性のない存在として位置づけられるか、という点である（職員がBさんに主体性がないと語っていないことにも留意すべきである）。むしろ、Bさんは家庭からの解放のため、自ら施設を探し出し、そこを居場所として利用していた。さらに、Bさんは就労規範の適用による自責の念を抑えるための生存戦略を取っていた。本稿はそこにBさんの主体性を見出すのである。そして、施設Xの職員たちは、そうしたBさんの生き方を肯定していると言える。

4 考察

本稿では、ひきこもり支援施設における参加の多様性を検討するべく、施設が推奨するような主体的・積極的参加を果たす利用者と、自ら活動を運営することのない利用者の語りを中心に検討してきた。その結果、まずは、Aさんの自己語りや彼に対する職員の評価から、施設内で主体的・積極的参加が推奨されていることを確認した。その上で、Aさんのように、施設内でなにか大きな困難を克服したのではなく、また、必ずしも主体的参加者とも呼べないBさんが、実は戦略的な主体であることを見出した。そして、施設の職員もまた、そのようなBさんの生き方

を肯定しており、それによって、施設内での「ひきこもり」当事者の参加の多様性が保障されていた。

ここで、先行研究でも扱った、長期間施設を利用する「ひきこもり」当事者について、再び言及する必要があるだろう。彼らは長期間施設を利用するあまり、変化のない者としてみなされていた。しかし、本稿では、自己評価の変化が小さな自己語り、つまり、安定的物語の根底に、当事者として日常を生き抜こうとする生存戦略を見出した。この結果は、長期間の施設の利用や主体的な参加を行わない利用者にも十分な主体性が認められるべきであり、彼らが安穏と施設を利用しているとは限らないことを示唆している⁴⁾。また、こうした本稿の結果は、長期間の施設利用を問題視する論調に対し、より彼らの「生きづらさ」に向き合うことを促しており、その点で実践的意義を有する。

無論、この結果をあらゆる支援実践の場に適用することはできない。しかし、本稿で示された結果は、施設の外部社会への性急な参加を求めるという議論への疑義を提起するだけでなく、「ひきこもり」当事者の変容に着目してきた先行研究においてあまり論じられてこなかった、安定的物語下の生存戦略を提示するに足ると考える。言い換えると、自己を変容させることが求められがちな支援実践において、変化のない当事者（あるいは一部の当事者が変化しないことの理由）に注目した研究が必要である⁵⁾。

以上の結果を踏まえると、今後は変化のない当事者のあり方の検討を進める研究が必要になるだろう。ただし、本稿で分析した2名の利用者は、衣食住が確保されているなど、最低限の生活環境が整っていたために、性急な社会参加を強いられなかったと考えることもできる。そのため、貧困状態にある「ひきこもり」当事者に対し、本稿の議論を適用することは特に困難であると思われる。よって、今後の課題として、変化のない当事者の支援施設でのあり方の検討を行うことだけでなく、貧困状態にある当事者の社会参加の過程の分析を挙げたい。

註

- 1) 「ひきこもり」当事者による就労をめぐる社会規範の相対化とその困難については、石川良子（2004）や川北稔（2005）など、2000年代から言及されてきた。また、川北は、就労をめぐる社会規範を強く内面化しているために、面接などで硬直する当事者の存在に言及している（川北 2006: 256）。このように、社会規範が過剰に当事者を追い詰め、かえって彼らの「社会復帰」を妨げることがあるため、社会規範の解きほぐしは重視される。
- 2) 居場所の提供と就労支援のどちらを重点的に論じるかで、支援実践の色合いも異なる。例えば、朝日新聞記者の塩倉裕（2002）は、若者同士の交流の場（フリースペースなどの居場所）を運営していた富田富士也と、就労支援を行っていた工藤定次の支援論を比較し、後者が前者に比べ強制的な傾向があると批判する。
- 3) ただし、ここでの支援の多様性は、暴力や体罰を伴う支援を含まない。
- 4) もっとも、場合によっては、「安穏」とフリースペースで過ごすことが必要とされる。
- 5) 変化のない当事者への注目は、関水（2018）の提唱する「動けなさ」への配慮と類似している。しか

し、その「変化のなさ」とは、本稿で見出されたような安定的状況下における生存戦略を含むものであり、すなわち、「動くことのできる」主体の検討を含む点で異なる。

参考文献

- 足立弦也, 2019, 「社会的孤立における居場所の関係性をもたらし承認機能についての考察——ひきこもり当事者・支援者へのインタビュー分析から」『立命館産業社会論集』55(1): 273-292.
- Gergen, K. and Gergen, M., 1988, "Narrative and the self as Relationship," L. Berkowitz ed., *Advances in Experimental Social Psychology*, Academic Press, 21: 17-56.
- Gergen, K, 1994, *Realities and Relationships: Soundings in Social Construction*, Harvard University Press. (永田素彦・深尾誠訳, 2004, 『社会構成主義の理論と実践——関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版.)
- 石川良子, 2004, 「『ひきこもり』の当事者の語りに見る危機と転機——『病いの語り』に関する議論を手がかりに」『社会学論考』(25): 1-27.
- 石川良子, 2006, 「『ひきこもり』と『ニート』の混同とその問題——『ひきこもり』当事者へのインタビューからの示唆」『教育社会学研究』79(0): 25-46.
- 川北稔, 2005, 「ストーリーとしての引きこもり経験」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』(8): 261-268.
- 川北稔, 2006, 「ひきこもり支援の課題と展望」忠井俊明・本間友巳編『不登校・ひきこもりと居場所』ミネルヴァ書房, 240-260.
- 中村好孝・堀口佐知子, 2008, 「訪問・居場所・就労支援——『ひきこもり』経験者への支援方法」荻野達史ほか編『「ひきこもり」への社会学的アプローチ——メディア・当事者・支援活動』ミネルヴァ書房, 186-211.
- 御旅屋達, 2015, 「若者自立支援としての『居場所』を通じた社会参加過程——ひきこもり経験者を対象とした支援の事例から」『社会政策』7(2): 106-118.
- 関水徹平, 2018, 「ひきこもり経験者による当事者活動の課題と可能性——当事者概念の再検討を通じて」『福祉社会学研究』15(0): 69-91.
- 塩倉裕, 2002, 「『引きこもり』を見る視点」『高校生活指導』(152): 6-13.
- 田中俊英・金城隆一・蓮井学, 2005, 「『待つ』をやめるとき——「社会的ひきこもり」への視線」さいろ社.
- 山本耕平, 2009, 「若者のひきこもりを精神保健福祉課題としてどう同定するか」『立命館産業社会論集』45(1): 15-33.